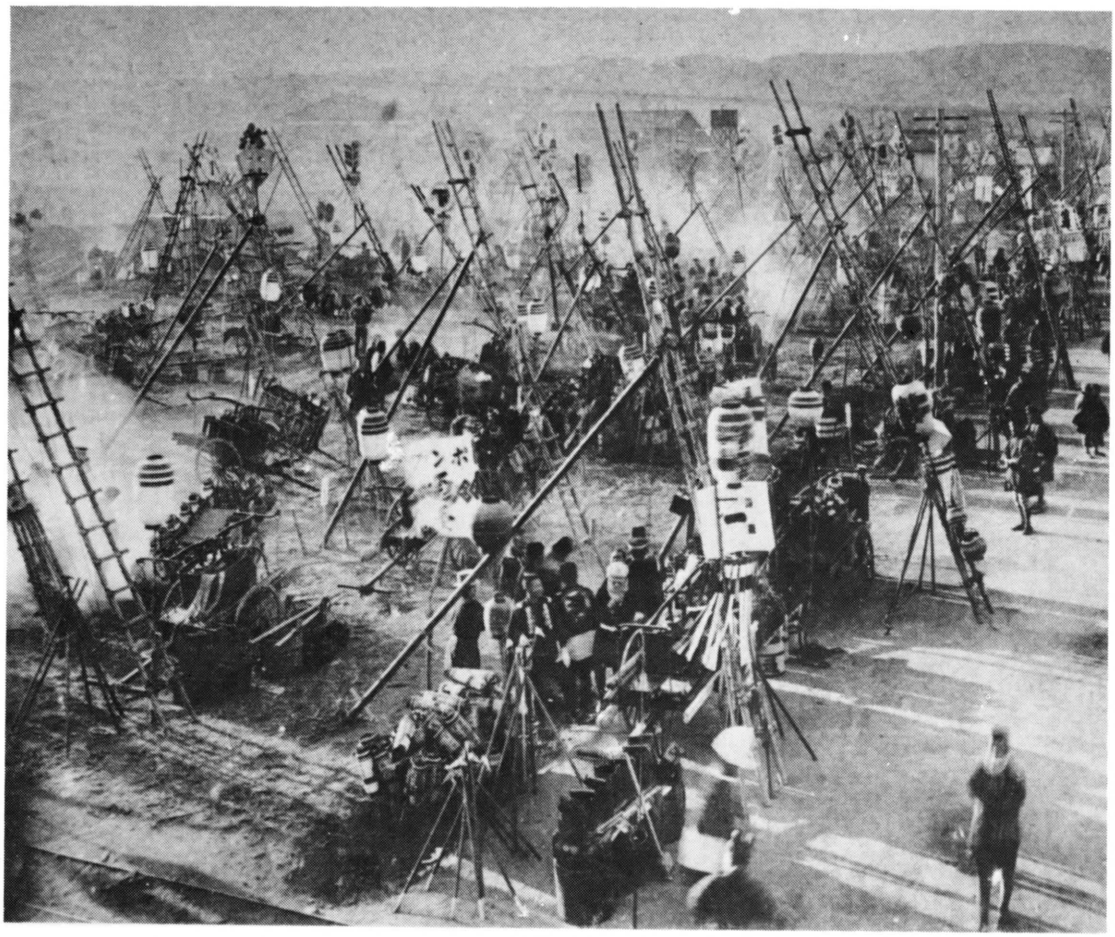
郷土はんのう



《大正6年，消防大点検》　写真提供：山口正子氏　複写：平沼恒夫　題字：小谷野寛一

発刊によせて

会長　加藤　一

飯能郷土史研究会の発会式が昭和四十八年十二月十五日、新装成った市役所五階の大会議室で行なわれ、当時の記録によると会員六十名で出発しました。

あれから、故井上紋次郎さん、山岸雄司さん、新井清寿さんたちの貴重な研究発表、さらには、島田欽一さん、本橋幹治さんの研究物の刊行、そして「陶説」に飯能焼に関連しての師岡貞雄さんの発表等々、このほかにも各自の研究にいそしんでいる方も数多くおられます。

その後、飯能市史〔資料編Ⅰ〕文化財の編集には会員の多くの方のご協力によって、また〔資料編Ⅱ〕飯能の自然―植物については横田稲吉さんの努力の結晶として将来に貴重な資料を残すことができました。

ここに、会誌「郷土はんのう」の創刊に当たり、今後会員各位の一層のご研鑽をお願いいたします。

飯能市の板石塔婆(一)

新井清寿

私たち日本人は祖先の霊をまつり、供養することを大切な務めと考え、多くの人が墓地を持ち、墓石を建てて供養しているのが今日の習わしとなっていますが、時代によって供養の方法はいろいろでした。

例えば、古代においては、墳丘を築いて墓とした時代もありまた種々な石塔や石仏などを建てて供養した時代もありました。中世に流行した板石塔婆（青石塔婆、板仏、平仏、板碑などともいう）の造立も供養の方法でした。

板石塔婆の起源を、修験道の碑伝に求める学者もいます。また五輪塔の脚部が伸び、かつ偏平になり、さらに長く供養の意味をもたせるために、木製から石材に変わったという学者もいますが、まだ定説はありません。

いずれにしても平安時代の仏教が貴族的であったのに対して鎌倉時代以降の仏教は、浄土宗をはじめ、時宗、禅宗、日蓮宗など多くの宗教者たちが里歩きを通じて民衆との接触をより深め、極めて地方色の濃い仏教が生まれていったのです。仏教の庶民化が進む中で、造塔の功徳も宣伝されて、祖先の供養と、前世後世の安穏を願っての板石塔婆の造立が盛んになったのではないかと思われます。

こうした時代のすう勢は、いち早く飯能地方にも及んで、盛んに板石塔婆（武蔵型のもの）の造立がおこなわれたのです。これら残されたものについて調査研究することを通じて、私たちの祖先が中世において、どのような社会文化生活を営んでいたかの諸相を知るうえに、極めて重要な資料となります。そこで、このたび埼玉県の板石塔婆の悉皆調査に協力して調査を進めました。その結果約一〇〇〇基に及ぶ板石塔婆が飯能に現存することが確認されたわけです。このほか未発見のもの、まだ地中に埋もれたり、破棄されてしまったものなど、数多くあるものと考えられます。ただ、調査して残念に思ったことは、以前の調査時はあって、今回の調査では見当らないものが数多くあったことです。これらの遺物は建てられた所に保存されてこそ価値を高めるものと思います。

さて、板石塔婆とはどんなものか、写真や図でおわかりのように、頂部を三角に切り、上部に二条線または切り込みをつけ中央上部に種子（主尊）が彫られています。種子の下に蓮台を彫ったものと彫らないものがあります。さらに種子の上方に天蓋、下方に花瓶や三具足などが彫られたものがあります。また種子のかわりに、図像や名号、題目が彫られたものもあります。主尊の下方にはたいてい造立年月日が刻まれ、法名、偈、願文などが刻まれたものなどさまざまあって、史料的価値を高めています。

石材は地方によってちがいますが、飯能市に残されているものは、武蔵国に多く見られる、秩父地方に産する緑泥片岩で、俗に青石と呼ばれるものです。

前に飯能には、約一〇〇〇基に及ぶ板石塔婆が現存すると書きましたがこれらについて少しふれてみますと、

まず年号の判明したものが四三三基ほどあり、中で最も古いものは、中山の心応寺所有の嘉禎四年（一二三八年）の銘がある板石塔婆です。これは日本最古の嘉禄三年（一二二七年）より僅か十一年後に造立されたもので、全国で八位に入る古いものです。確認された中で最も新しいのは、永禄十二年（一五六九年）ですから、約三三〇年に渡って、私たちの祖先が心をこめて造り続けたといえます。

次に主尊が判明したものが五七三基ほどあります。このうち阿弥陀如来を主尊としたものが五〇四基で全体の八八%になっています。釈迦如来を主尊としたものが二七基で、そのほか大日如来、観音菩薩、図像、名号を刻んだものとなっていて飯能地方の人々の信仰の対象を物語っているといえます。

ではこれらたくさんの板石塔婆は、どんな人々によって造立されたのでしょうか、中山の智観寺にある仁治二年（一二四一年）と三年の二基は、中山助季が父母の供養のため建立したと

（吾　野）

法光寺の板石塔婆
貞治6年（1367）

高さ：100cm
幅　：上，25cm
　　下，28cm
厚さ：上，2.5cm
　　下，2.8cm

銘文にあり、領主によって造立されたといえます。このほか造立者の名で僧玄明とか沙弥西阿などとありますので、僧侶によって造立されたもの。結衆百人などと刻まれたものもありますので信仰によって結ばれた人たちによって建てられたもの。孝道禅門など農民と思われる人の手によって建てられたものなど、各階層の人々によって造立されたことがわかります。

また造立の趣旨からみると、助季のように父母の追善供養のもの、逆修（ぎゃくしゅ）といって生前供養のもの、念仏供養、日待供養、申（さる）待供養などとあって、造立趣旨が多面的であったことが察せられます。

最後に、板石塔婆の種類、年代区別、彫りなどの専門的なことや、芸術性などのことは次回に譲り、庶民生活との結びつきについて想像の世界にはいることにしましょう。

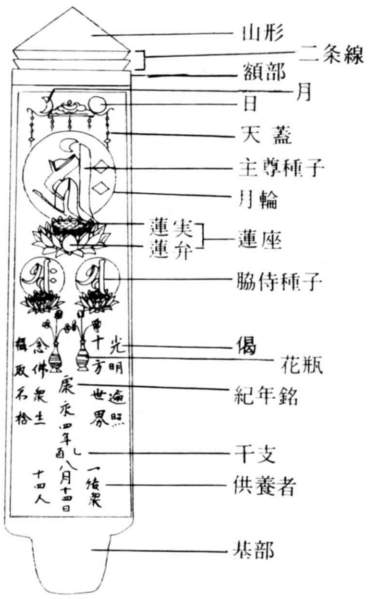
固い石に、阿弥陀や釈迦その他を力強く刻みつけた人は誰だったろう。円空が僧で、彫刻の技術を身につけ、多くの仏像を残しているように、僧によって刻まれたものか、或いは、技術者である、石工が刻んだものだろうか。これらの人は、この土地に住んでいたのだろうか。或いは、渡り職人だったろうか。

飯能の板石塔婆には、高さ二メートル以上の大さなものがあります。こんな大きな石をどのようにして運んだのだろう。当時の道路、経済、社会の状況との関連でさまざまのことが想像されます。また運ばせた人は、大きな権力者なのか　豊かな経済力を持っていた人か、或いは運ぶことにより功徳があらわれると信じた民衆の力だろうか。

そして、この板石塔婆造立は、近世初頭（ほぼ慶長頃）に突然消えてしまいました。

想像は、それからそれへと、広がってやみません。

板石塔婆の部分名称と形式



キリーク
阿弥陀如来

キリーク
同（異体梵字）

バン
金剛界大日如来

サ
観音菩薩

サク
勢至菩薩

バク
釈迦如来

名号板石塔婆

題目板石塔婆

図像板石塔婆（浮彫）

図像板石塔婆（線彫）

飯能地方のお盆さま

小谷野寛一

お盆さまが近いので「うらぼん」のことについて、おおまかに書いてみましょう。

七夕から始まる

昔からのしきたりを守っている家では、七月七日に、お寺へ付け届けに行きます。いわゆる盆供を持っていくのです。なぜかと言うと、お盆がここから始まるからです。

昔の盆供は、品物が多かったようです。禅定門の家では米一升、信士は二升、居士は五升と言われています。院号つきの大居士など、どのくらい持って行ったものか、まだ聞く折がありませんが、さぞ、大変なことだったでしょう。

しりを重げに歩いている人をからかって「あひるが盆供をしょったようだ」などと言う言葉があるのをみると、盆供の人たちはお米の他にも、作ったもの、取れた物等いっぱい背負って、お寺へ行ったのでしょう。あひるは、おしりの重いもの、それが重い荷を背負うのですから、よちよちと大変です。こんな言葉が出来たのですから、この風俗は長く広く行なわれたように考えられます。

寺への付け届け

ついでに昔からの付け届けの回数を言いますと、お正月、春彼岸、お盆、秋彼岸、歳暮、これで、五回となります。家に嫁むこを迎えると、寺に挨拶に行くのも、きまりとなっていました。寺は、一家の生活の中に深く位置していたことがうかがえます。

盆花

今は盆花と言えば、あの金銀の紙で作った造花を思いますが、昔は野の花でした。どんな花ときまってはいません。飯能地区はどうかわかりませんが、「盆花迎え」とか「草市」とかが行なわれました。こうして盆棚にかざるものを、数日前からいろいろ用意しました。野の花をつむ時、すでにそこに仏が宿っている—という考え方でした。暮れの「お松迎え」も同じです。こんなところに我々の先祖の深い心を見る気がいたします。

盆棚

今は仏壇に飾りつけをする家が大部分ですが、盆棚を改めて作る風習は、まだ飯能にも残っています。お位はいを飾り、仏の軸物を三方にかけ、この台上に、くさぐさの物を上げます。目立つのは、縄につるした「ほうずき」です。どうもこれは、「魂のすがた」として、飾られたようです。昔の人は、大変、創造的で直観的でした。ちょうどこの頃、畑や屋敷に赤いちょうちんをつるすほうずきを、仏壇につかったなどは、すばらしいセンスだと思います。

盆棚にきまって載せるものは「はすの葉」（代用は芋の葉）これに、ためた水をそそぐのはみそはぎ。その他、果物菓子等あふれるほど。ところが、ちょっと気の毒なのは、この壇にのぼれない無縁仏で、お位はいは壇下にひっそりと置かれ、たいした供物も上げられません。

「無縁」とは、「夫婦の縁の結べなかった者」の意味。若くて死んでしまった者は、なぜか冷やかに扱われました。

新ぼとけ

新しい仏様のある家では、早目に盆ちょうちんを軒下につるします。優雅な「ぎふちょうちん」などがつるされ、やさしく甘悲しくお盆迎えの心の準備をいたします。寺院では、昔高竿の上に灯ろうをつるしたりしましたが、皆、仏様の足もとを照らすためです。

お迎えの日

墓地掃除は、それまでに済ませておいて、七月十三日（月おくれなら八月）の夕、ちょうちんを持って家族がそろって仏様のお迎えに出かけます。最近は早朝のお迎えも目につきますがちょうちんは忘れません。

墓地に迎え火をたき（明るくし）香花を供え「さあ、お迎えにまいりました」と声を掛けます。墓石に背を向けて「おんぶ」する形をとるしきたりが、吾野にあると聞きましたが、これは県内にもあります。おんぶした手は解かず、家まで行くのだそうです。家のかど口でまた火をたきます。墓地からつけて来たちょうちんの火をつかいます。縁側下に水桶など置いて「さあお足を」と言ったり、水を置かないまでも、ちょうちんで仏様の足もとを照らすしぐさは今も残っています。全く仏様を生きているものとしてのもてなし方です。

さて、縁側から上がるのはなぜでしょうか。ここは「さもと」と言って「尊い来客の出入口」だからです。結婚式、葬式にも使われるのはそのためです。

仏壇の前で、せめて一夜でも、ここで食事をするのは「先祖さまといっしょに」という意味です。家族のだんらんに仏様も加わってもらうためです。

お盆の期間中のごちそうは、いつは何々と家例になってる話も聞きます。一般的なのは、ぼたもちでしょうが、うどんは、

かならずと言われて来ました。これは、仏様の持って帰るおみやげをしばる「ひも」（荷なわ）がうどんになるからです。

仏様が乗って帰る「乗り馬」は、なす・きゅうりなど一定していませんし、数も家々で違います。ともかくこの馬に乗って、たくさんのおみやげを持ってお帰りになります。十五日の夕方と決まっていましたが、現今十六日も行なわれています。一日も多くという意味でしょうが、慣習は守られる方がなおゆかしく感じられます。

ともかく日本人は、このようにご先祖さまを、生きているものとしてお仕えし、温かくもてなして来ました。盆行事の一つとらえても、そうした心をひしひしと感じます。

阿寺の和鏡

本橋幹治

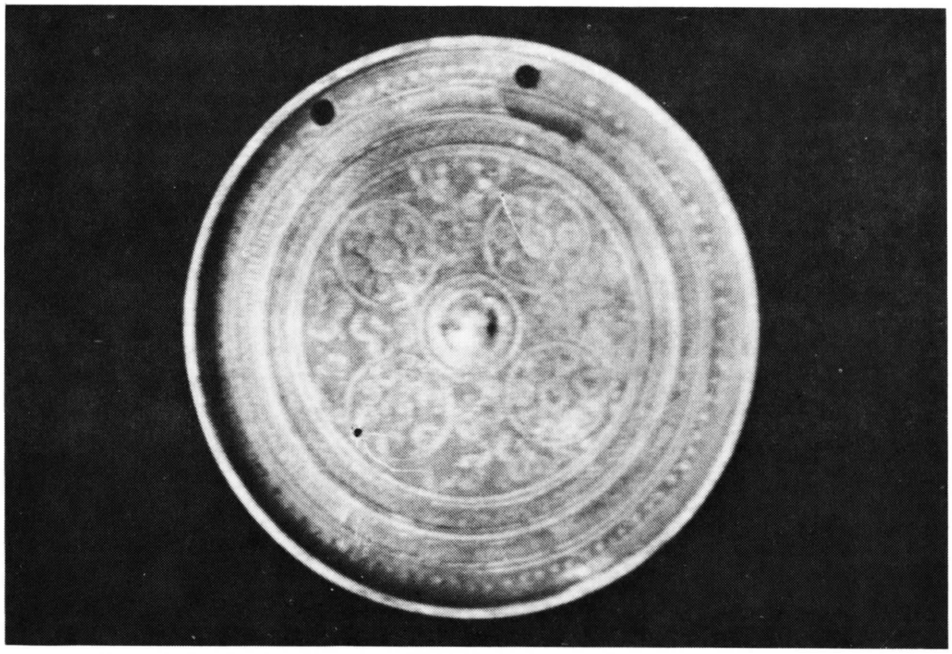
五月三十日、東吾野の井上峰次さん宅を訪ねた時、阿寺出土の和鏡（円）を見せて貰ったので、その大要について、私の管見を報告いたします。

法量をいうと、円鏡の直径九・八センチ、縁〇・二センチ、厚さ〇・一センチ、花芯座　直径一・五センチ、重量八〇グラムで比較的軽量小形でした。保存状態は極めて良好で、表裏とも錆を生せず、かなり錫の多い良質のもので、鏡面には顔がうつるほどでありました。紋様は鏡裏を四分割して、丸に八つの菊花を描いた地紋が四つあり、その間に松葉が散らされ、外区の上方には、鏡をつるすための穴が四センチの間隔で二箇あけられ、その下部内区の上方に双雀が向い合って飛翔しています。外区は三線により分割され、外から鋸歯文帯、竪文帯、斜文帯をめぐらしている。いわゆる擬漢式鏡とよばれる室町に流行した一形式です。名前を「丸に菊花紋松葉散双雀鏡」とつけましたが、いかがなものでしょうか。

針書銘も墨書銘もないので、室町初期と見たい。擬漢式鏡で薄平、軽量、低肉であることも一つの理由であります。

次に出土について述べると、市内大字長沢一九五四（通称阿寺）の中村源一さんの旧宅地内から、昭和三十年頃出土したものだそうです。中村さんが新宅に移ったのは、昭和十六年であるから旧宅をこわした時、地下に埋れたとすると、約十五年間地下に眠っていたわけです。

伝来については、全く不明とのことですが、室町に入手したとすれば、約五百年伝世し、その後十五年間土中にあって、今再び日の目を見たのです。なお錆ていない点を疑問に持たれる方もあるでしょうが、「恐らく煤が鏡面を保護していたのでしょう」という、西沢美術店主の見方をそのままお受けし、ともかく市内出土の鏡を見るのは、私にとっては初めてで、興味深く拝見しました。



寸法

直径	9.8cm
縁	0.2cm
厚さ	0.1cm
花芯座	1.5cm
重さ	80.0g

やきものあれこれ

双木利夫

やきものは火の芸術と云われ、現在、日本の陶芸は世界第一位です。やきものは陶器と磁器に分けられ、陶器は田土や山土を原料として作成し、磁器は白い堅いやきもので、白い石や磨き砂のようなものを粉末にして成形したものを、一度素焼きしてから、薬をかけて本焼きをするのです。現在は、この方法によっています。

市内苅生に新飯能窯が開業して、今秋で満三年となります。

私は、そこで習い覚えた技術を活かして、土蔵の軒下に仕事部屋をつくり、閑さえあれば、粘土にてやきものを作って楽しんでいます。不器用なので、ロクロは使用せず、紐作りにて、主に花器を作っていますが、手作りにはロクロで出来ない不格好の良さがあると、自ら慰めています。昨年末には、私の幼稚な作陶展を開き、皆さんからお誉めを戴き赤面の至りです。

昨今、やきものブームにて、殊に若い人達には非常な人気となっています。当市でも、昨年から公民館主催にて陶芸教室が開かれて、今年は二回目になります。受講生は、婦人の方が多く、実に熱心に楽しく作業しています。講師は、虎沢英雄先生で、私はお手伝いをしています。

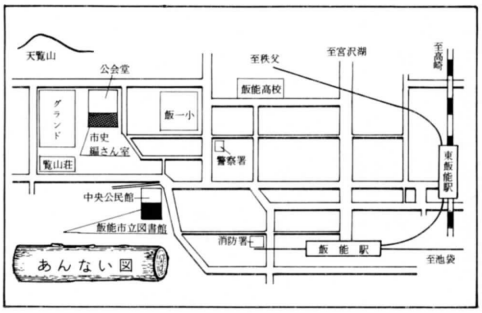
先生は、岐阜の土岐市にて陶器工場を経営して居られ、毎週来飯されます。昭和四十六、七年の頃、私の飯能焼コレクションをご覧になって、飯能焼の素朴と優秀さに惚れて、市内南高麗苅生に土地を求めて、飯能窯を築かれたわけです。

私の長年の夢が、虎沢先生によって実現出来て、心から喜んでおります。

これは、飯能焼の復活であって、飯能は東京の大消費地に近く、この点、益子に比して地理的条件に恵まれているので、飯能焼が発展して、将来、当市の重要産業となることを夢みています。

益子には、現在二百位の窯があり、それぞれの窯が特徴のある陶器を作って、何でも益子焼にて間に合う状態で、又、年間五十万人の観光客があると聞いていますが、その人達の落とす金額は莫大なものです。

当市には、年間二百万人の観光客がある由ですが、落とすものは、ゴミばかりのようです。飯能も将来沢山の窯が出来て、益子のような、産業と観光の調和した町にしたいものです。



市史編さん室だより

市町村史編さんの気運は、全国的に一種のブームとさえなっており、埼玉県下九十二市町村のうちでも、すでに完了したまちまで含めると、実に七十余の市町村が事業を行っています。

昭和四十年代からの建築ブームによって、歴史上の貴重な資料がつぎつぎと散逸してしまう恐れがあり、この時、各市で史誌編さんの事業が始まったのは、当然のことといえましょう。

いずれの町も、資料収集から発刊までを一つの目途として行われていますが、決まった方法があるわけでもなく、いろいろな方法で行われているのが実状です。

当市の事業は、昭和四十九年度から始められ、すでに発刊された文化財、植物のほかに考古、行政、社寺教会、地名姓氏、民俗、教育、動物、古文書、産業、地形地質地理など十部門余の資料編の発刊と上・下二巻にまとめる通史編の発刊が予定されております。

多くは、この研究会にも所属しておられる先生方に調査員となって頂き、資料編の全ては、地元の人達で調査・執筆を進めることとなっております。

執筆に当っては、何といっても不可欠な資料収集という仕事があります。

これには、多くの情報提供と労力が必要ですが、かぎられた人員と時間では、なかなか思うように参りません。

この編さんに当っては、その基本方針の中で「……広く市民の協力と参加を求めて、市民の役に立ち……」とうたわれております。

郷土史研究会の皆さんにも、是非この趣旨をご理解頂き、ご援助を賜わりますようお願いいたします。

なお、参考までに調査をした資料のうち、古文書については、慶長期のものを最古に、五千五百点ばかりで、その中で必要と思われる二千点余をコピーして分類整理を進めております。

この外にも、まだ多くの貴重な資料が、埋蔵されていることと思われますが　ご存知の方は市史編さん室へお知らせ下さるようお願いいたします。

☎　三ー八二五八

地区だより

【加　治】

藁屋根が次々に姿を消し、生活や生産に使われてきた道具類も簡単に捨てられ、庚申塔や馬頭さんもいつの間にか失われる。こんな現実の中で、郷土の文化遺産を私たちの手で守ろうという声がおき、七年前に「加治郷土資料同行会」が生まれました。

年と共に会員が増加して現在一三六人。主な事業としては、加治文化祭参加の「郷土資料展」は恒例となり、会員出品の資料で、公民館の二階ホールはいっぱいになり盛況です。

このほか、地区の文化財めぐり、文化財講座、石仏講座、古文書講座、刀剣講座、浮世絵講座、旧街道を歩く会、遺跡の発掘協力、飯能焼矢颪窯の調査、八王子車人形座の里帰公演開催などのほか、市史編さん、加治の教育百年史編さん事業への協力も続けられています。会員がみな熱心なので、行事にさらに工夫を加えていきたいと思います。

（西野長治記）

【精　明】

こんなことがあっていいものか、と思うのだが、精明の場合、明治二十二年から同三十四年七月までの間、村長がいなかったことになっている。旧精明村から移管されて市役所にある名簿にもそうなっているのだから何とも不思議なことである。

そのことについて、いろいろ手をつくして調べているのだが、四人の名前だけはわかるけれど、さてその人が何年何月に就任したのか判然としない。しかし、明治二十六年の徴税令書には精明村長・山崎兼三郎。同三十三年の県税土木補助申請書では明らかに精明村長・森玄吾としてある。

なぜ初代から四人もの村長が名簿から落ちてしまったのか、そのいきさつは、なおさら不明である。だが、このままで済ませることではない。郷土史とは、つきつめていくほどに分からないことが余りにも多いものである。

（島田欽一記）

【吾　野】

大正十年まで秩父郡であった吾野地区は、往古より秩父文化圏の中にあって、飯能市内でも相当早くから開かれた地域であると思われる。

山襞の坂地に散在する民家、山巓にあって修験道場であったといわれる大鱗山天竜寺（通称子の権現）同じく密教徒によって開かれたという高貴山常楽院（通称高山の不動様）秩父妙見の兄弟といわれる我野神社、喜多川神社等々それぞれ歴史の重みを感じさせる。

しかし、これらの研究はまだ緒についたばかりで、これからの調査が期待される地域でもあろう。

まだ、会員が少ないため活動状況をお知らせすることができないが、この機会に新会員を募集して、吾野地区の郷土研究をさらに発展させたいと思う。

（浅見徳男記）

【東吾野】

濃みどりの樹海からひと言。

地方史にとりくむ誰もが知ることは、中世の史料が意外に少ないことである。が、〝おらが在所〟風に言うと、東吾野には、阿弥陀堂を始め、鉄仏、木彫仏、板石塔婆、文書類等比較的多くの中世遺物が残されている。

これらを守り伝えてきた私たちの祖先は近世になって、今日いわれる西川林業の美林を造った。そして昭和初期の経済恐慌には報徳仕法により、住民総ぐるみで更生運動にとりくんだ。

そのような意図から、昭和四十五年に「東吾野郷土誌」を刊行した。落合、石田両元老の肝いりと、井上紋次郎先生のご努力によるものだが、ほかの多くの人たちも参加し、物心両面で協力し合っての上梓であった。

しかし、この郷土誌に書かれない多くがあり、埋もれた史料も残っている。だから、今でも当地区のそこここから、史料や助言が寄せられている。遠祖の事蹟を探り、後世に伝えようとする意欲が、東吾野にはまだ消えていない。

（井上峰次記）

【二　区】

二区とは、もとより旧飯能町時代に、小瀬戸、久須美、小岩井のいわゆる第二尋常小学校を通学範囲とする三大字につけられた名前であるが、他に適当な呼称もないのでそのまま使わせていたゞく。

一、二世代前まではほとんどが農業、それも皆どんぐりの背くらべで大地主というのが昔から存在しなかった。

従って、神社仏格にも大きなものがないかわりに、明治の廃仏棄釈の時も陰にかくれて残ってしまったものが多い。

幕府の直轄地であったとはいうものの、三字がそろっていたわけでなく、清水領になったり一ッ橋領になったりばらばらで、名主は連絡をとりながら適当におよいでいたというのが当っているかも知れない。明治になって小瀬戸・久須美は七小区であったが、小岩井は八小区であり、一緒に行動するようになったのは、何といっても連立小学校からである。自治会の区域としても最も小さい地区なので、今後共ご指導ご鞭撻の程を!!

（野口正元記）

図書館だより
郷土資料を収集しています

市立図書館では、重要な仕事の一つとして、郷土に関係のある資料の収集をしています。これは、単に集めて保存しておくためではなく、郷土の研究や調査をする人たちの役に立つように公開するためです。

郷土関係の出版物の中には、この地方のことを書いた本も、この地方の人が著作した一級の図書も含まれますが、現在二千数百点に達しており、その目録の作成の作業が進んでいます。

最近出版された図書について解説しましょう。

○「小岩井渡場遺跡発堀調査概報」（飯能市教育委員会刊）

○「入定仏・川崎村根元記」（島田欽一著・精明郷土史研究会刊・二一頁）――郷土研究家の著者が足で調べた郷土のトピックス。「大山街道」の続編。

○「彰義隊の怨念」（永岡慶之助著・ビッグフォー社刊・三〇二頁）幕末の上野戦争に散った彰義隊の物語。殊に飯能戦争に関係ある振武軍の資料について詳しく解説している。

○「ストッキングで歩くとき」（堀場清子編・たいまつ社刊・一六八頁）当市の随筆家坂口和子さんの戦後の青春を書いた「千手幻影」が収録されている。

○歌集「榛野（はりの）」（赤田喜美男著・短歌新聞社刊・一四八頁）第九回埼玉文芸賞作品

○「親と子のうた」（飯塚書店刊・一二三頁）童謡集。野口家嗣作詩「取手の母子草」ほかを載録。

○合同句集「水のわ」（水のわ会刊六二頁）本市在住の女流俳人二十四人が二〇句ずつ出句している句集十四集。

○「多摩のあゆみ・十一号」（多摩中央信用金庫刊・八八頁）郷土研究誌として異色ある存在今号には「川越鉄道の創業」「西武線・思い出の車輌」など鉄道に関する論文、写真を収録。

○「高岡寺院跡発堀調査報告書」（同調査会刊・一二四頁図版三四頁）日高町高岡にある遺跡の調査書で、本市の織戸市郎氏が副団長として参加。

役員名簿

〔会長〕
加藤　一　二―三二九一

〔副会長〕
双木利夫　二―二〇一三
新井清寿　二―四四七〇

〔理事〕
〈旧飯能〉
織戸市郎　二―五八二九
小林雅二　三―一四一九
新井幸一　三―四一三七
平沼恒夫　二―五九〇九

〈二区〉
野口正元　二―四四〇一
小谷野寛一　二―六〇〇〇

〈加治〉
西野長治　二―三三六〇
小山誠三　三―三四一二
志茂道一　二―二五一八

〈精明〉
島田欽一　二―四三三六
松野勝治　三―三〇六二

〈南高麗〉
内野久喜　二―四四八九

〈原市場〉
倉掛一男　七―一一〇八
本橋幹治　七―〇一四〇

〈東吾野〉
井上峰次　八―二〇一九
蘭幕兼吉　八―一〇一二

〈吾野〉
清原恒雄　八―一一三一
横田稲吉　八―〇一一六

〔監事〕
吉良憲夫　二―二二六八
山岸雄司　二―二四八〇

〔事務局〕
飯能市立図書館内
赤田健一　二―二一一四
飯能市史編さん室内
浅見徳男　三―八二五八
飯能市本町八―八
岡野達雄　三―三三五一

―※―※―※―

お知らせ

当会では、昭和五十三年度の新会員を募集しております。

会員には、会誌や市史編さん室だよりなどの配布、講演会へのご案内、はんのう文庫などの郷土にちなむ資料を実費にて頒布するなどしておりますので、是非、ご入会下さいますようお願い申し上げます。

※年会費　千　円

入会申し込みは、事務局、各理事宛にお申し込み下さい。

表紙写真説明

大正六年、飯能町と近隣村連合の消防大点検が行なわれた。

林立するはしごとまといの豪華ショーは、現在の丸広百貨店あたりの広場。手前には、飯能―入間川馬車鉄道のレールが見える。

解説　飯能市消防署長　都築実三

編集後記

〝郷土はんのう〟の創刊号をお届けいたします。

〝温故知新〟のもとに、これより飯能の大地に息づく、歴史的事象を一つ一つ掘り起こしていこうと思っております。

ただ、本会誌は専門書でも、啓蒙書でもなく、飯能が歩んできた径であり、その系譜をひく私たちの物語であると思います。

発行所　飯能郷土史研究会
飯能市仲町二八―一
飯能市立図書館内
印刷所　コバヤシ印刷
飯能市大河原一八七
☎　三―七五三九